様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	社会系コース／原田　昌博

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが（平成24年8月28日）、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1．目標・計画

教員養成大学の外国史担当教員としては、学生に外国史を理解させることはもちろん外国史に関する教材研究を行うための能力を涵養することが重要であると考える。①授業内容に関しては、これまでも外国史関連授業の中では、社会科授業の教材研究に資することを目的に、一方では通史として長期的な視点から歴史をマクロに捉える内容、他方で特定の時代を多面的な視点（政治・経済・文化など）からミクロに捉える内容を設定してきた。本年度においても、「外国史概論」では外国史の通時的な理解のために200年の長期の歴史を因果関連を明確に理解できる内容を設定する。逆に「外国史特論」では特定の時代の歴史を様々な観点から分析する内容を設定し、学生が歴史を捉える視点を育成していく。②授業方法としては、講義では文字・写真・図表など様々な史資料を提示することで学生の歴史的関心の喚起と歴史的思考力の涵養に配慮する。さらに演習では、学生による発表の場を設定し、プレゼンテーション能力の向上を図るとともに、積極的に発言する態度も育成するよう心がける。③評価に関しては、テストやレポートはもちろん、授業中の発言なども考慮した総合的な評価に努める。

2．点検・評価

目標に掲げたように、前期の「外国史概論」では外国史の通時的な理解のために200年の長期の歴史を因果関連を明確に理解できる内容を設定し、通史として長期的な視点から歴史をマクロに捉える授業を行った。また、後期の「外国史特論」では、特定の時代の歴史を様々な観点から分析する内容を設定し、特定の時代を多面的な視点（政治・経済・文化など）からミクロに捉える授業を行った。双方の授業では、文字・写真・図表など様々な史資料を提示することで学生の歴史的関心の喚起と歴史的思考力の涵養に配慮している。また、前期の「史学演習」や後期の「史料講読」の授業では学生による発表の場を設定し、プレゼンテーション能力の向上を図るとともに、積極的に発言する態度も育成するよう心がけた。評価に関しては、テストやレポートはもちろん、授業中の発言なども考慮した総合的な評価に努めている。また、後期の「外国史特論」ではレポートの回数を従来の学期末1回から中間レポートと学期末レポートの2回に増やして学生が復習する機会を保証するとともに、典拠の明示（引用文献・脚注）など大学での研究・レポートに不可欠な形式に関しても指導した。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

①進路や日常生活の悩みなどについて学生からの相談があった場合、随時積極的に応じ、適切な助言を行う。
②情報提供や日常の対話などを通じて、指導学生の就職指導を行い、特に教員採用試験の受験または大学院への進学に対する動機づけをはかる。

2．点検・評価

①授業・ゼミ・会議以外は研究室を開放して、ゼミ所属学生や講義受講者などの質問・相談に随時積極的に対応した。なお、ゼミでは学部学生4名、大学院生4名を指導した。
②教員採用試験を受験するゼミ所属学生には大学が行う諸行事・説明会への出席を促し、卒業・修了年次の指導学生4名全員が希望する地域・校種の教員採用試験を受験し、このうち1名は本学大学院への進学を決めた。

Ⅱ－2．研究

1．目標・計画

①科学研究費補助金の申請（新規）を行う。
②現在の科研テーマ（ワイマル共和国期ベルリンにおける街頭闘争の展開に関する実証的研究）に関して夏期休暇中に渡独して追加的・補完的な史料収集を行い、その分析を進める。
③これまで収集した史料と併せて分析・検討を加えていき、論文あるいは学会発表を通じてその研究成果を公表する。

2．点検・評価

①新規の科学研究費補助金（基盤研究C［2013年度～2015年度］）が採択され、補助金を受給した。
②8月下旬から9月にかけて渡独し、予定通り科研テーマに関する史料調査・収集を実施した。現在、収集した史料の分析を鋭意進めている。
③査読有の雑誌（A論文）に論文1篇を投稿し、掲載された。また、学会発表に関しては、6月の「中国四国歴史学地理学協会大会」で報告を行い、さらに11月には京都大学の「西洋史読書会大会」でも報告を行った。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

①学内での委員としての職責を果たし、本学の運営に貢献する。

2. 点検・評価

学部入試委員会委員として委員会に出席し、コースと委員会のパイプ役を果たした。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携，国際交流等

1. 目標・計画

①授業参観や附属学校教員との意見交換などを通じて附属学校での実習指導を支援する（附属学校）。
②鳴門史学会での活動を通じて地域社会との人的・学術的な交流を推進するとともに、自治体の公開講座を担当することで市民に向けて情報発信を行う（社会連携）。
③留学生を積極的に受け入れる（国際交流）。

2. 点検・評価

①海外出張のため9月中に行なわれた指導学生の教育実習授業参観ができなかったが、11月での副免実習では附属学校に出向き、授業を参観し、指導を行うとともに、附属学校教員と意見交換を行った。（附属学校）
②鳴門史学会の活動として大会（10月）および年4回の例会を企画運営した。特に、研究大会に関しては「廻船問屋山西家からみた阿波・撫養の歴史」をテーマに江戸時代から明治にかけての鳴門・徳島地域の様子を考える講演会を企画・実施し、多くの一般市民が来場した。（社会連携）
③残念ながら、今年度は留学生を受け入れる機会がなかった。（国際交流）

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）

特に以下の3点で貢献した。
①授業の充実（方法・教材など）を積極的にはかり、学生の外国史への理解を可能な限り容易・具体的にするように努め、結果として授業アンケートなどで学生の高い評価を獲得することができた。
②科学研究費補助金を新規で獲得し、本学の外部資金獲得に貢献した。
③ドイツで未公刊史料の収集を行い、新たに発見した史料を用いて査読付き論文としてまとめるとともに、二つの学会で成果を公表した。